

香凝女史（廖仲愷の未亡人、廖承志氏はその息子）の思い出は『回憶孫中山和廖仲愷』（中国青年出版社、1957）の翻訳である。両篇とも孫文に親近していた女性たちの文章で、革命家孫文の面目をいきいきと伝えている。岩村・安藤・池田・北山諸氏の論文は、それぞれ近現代中国史の研究者としての立場から、現代の中国革命と日中関係における、孫文の思想と役割を明らかにしようとした、すぐれた労作ということができようであろう。なお、巻末に付された高橋久美子氏の編纂した「孫文在日年表」はすぐれた労作で、孫文研究者にとっては、すこぶる有益なものと思われる。目次に、年表の執筆者だけ名前があがっていないのは、片手落ちというべきではなかろうか。

なお、孫文に関する研究文献目録としては、かつて野沢豊氏が編纂した「日本における孫文関係文献目録」（思想1957—6、「孫文と日本」特輯号）が、もっとも詳細なものである。最後に、アサヒグラフ臨時増刊『中国・激動の半世紀』（朝日新聞社、1967・4・5）を紹介しておきたい。「清朝倒壊から文化大革命へ」という副題が示しているように、辛亥革命から、現在の文化大革命に至るまでの写真約300葉を収載した、きわめて興味ぶかい画報である。特に「孫文と蔣介石のある瞬間」（p. 40）など、いろいろ考えさせる写真もある。孫文の写真は多くはないが、半世紀にわたる中国革命の発展の跡をたどるのに、簡にして要をえたものといえよう。（山根幸夫）

## R. H. トーニー 『急進主義の伝統』

〔新評論刊、A5判342ページ、800円〕

トーニー教授の遺作『急進主義の伝統』が、浜林正夫・鈴木亮両氏によって訳された。トーニー教授の名前は、『宗教と資本主義の興隆』（出口・越智訳、岩波文庫）と『ジェントリの勃興』（浜林訳、未来社・社会科学ゼミナール）の二名著の翻訳があるので、歴史学の専攻者にはすでに親しいものであろう。しかしながらトーニー教授のキリスト教的ヒューマニズムの立場に立つ独特の社会主義理論を表明した『獲得社会』の抄訳があること（山下重一訳、河出『世界思想教養全集』中の『イギリス社会主義思想』に収録）はあまり知られていないかもしれない。これまで歴史家トーニーと社会主義者トーニーは、いかなる関連に立ち、またそれがかれじしんの内部でどのように共存していたのか、という問題に、あまりふれることなしに、トーニー教授の歴史学における貢献が語られるのがつねであったように思われる。

もっとも上のような視角が、わが国においてまったく欠如していたわけではない。教授の業績をその経歴の中におさえて、そこに「クリオの尊厳を知る」歴史家トーニーの秘密を求めたのは、越智武臣氏であった。氏の最近の問題作『近代英国の起源』（ミネルヴァ書房）はトーニー教授に捧げられたものであり、また氏には、教授に対する尊敬と愛情に彩られた情感あふれた二つの名文がある。（『宗教と資本主義の興隆』下巻「訳者

あとがき」と会田雄次編『歴史の名著』（至誠堂）収録の「トーニー」）。ここに新たに訳出された『急進主義の伝統』こそは、トーニー教授における学問と実践のかかわりあいを、教授みずからの口を通して語ったものであり、その意味で広く読まれる価値がある。

本書に収録された十二編の論文は、一・二の未発表のものを除き、すべて何らかのかたちで発表されたものを、教授の没後、親しい友人たちがつぎのようなかたちで編集したものである。第一部は「三人の急進主義者」と題され、ウィリアム・ラヴェット、ロバート・オーエン、ジョン・ラスキンの生涯が評伝ふうに語られている。第二部は「教育」であって、そこには「民主的教育のひとつのこころみ」という1914年発表のものから、53年に書かれた「労働者教育協会と成人教育」までの40年間の論文4編が収められているが、トーニーにイギリス社会に内在する矛盾の存在を教え、かつまた彼の学問的課題を規定したものが、この「教育」の問題であったことを、はっきり示している。すなわち大学卒業後イースト・エンドに飛びこみ、また労働者教育の実践に参加した彼をとらえたのは、ジェントルマンのみにしか開かれていなかった高等教育の門をすべての才能ある若者に開かねばならないという確信であった。そしてその実現を求める闘いと、かかる現状を生みだしたイギリスの過去への探求が、彼の人格において離れがたく結びあったのである。そしてこの基調はそのまま、「ブリテンにおける社会主義の現状」を論じ、その社会民主主義の未来への展望を語り、具体的な問題としての「石炭産業の国有化」を論じた、第三部「政治」にも貫ぬかれている。そこにはまぎれもなく、トーニーその人がいるのであり、その理論も彼の生涯と個性を離れては語りえないものである。さて最後の「文学」と題された第四部を飾っているのは、「社会史と文学」という長編の論文である。エリザベス時代に題材をとったこの論文は、その視野の広さと材料の豊富さでわれわれを圧倒する。そして「社会史」に、分業の結果としての研究の総合という役割りを期待する彼の姿勢に、歴史家トーニーの本領があったことを、あらためて思いしらせてくれる。

以上のように内容がきわめて多方面にわたり、しかも発表年代もまちまちである本書の諸論文を、簡単に要約して紹介することは、至難のわざである。トーニーの八十年以上もの生涯と多方面の活動に裏うちされた豊かな思索は、要約を拒んでいるようにみえる。だが本書を読了すれば、「それらはすべてまぎれもなく『トーニー』である」という編集者の序文の言葉は納得できるであろう。だがこのトーニーをその生きた時代の中であらためて位置づけようとするならば、ちょうど彼の生涯と重なりあって成長してきたイギリス労働党の歴史を顧みる必要があるであろう。その初期のリーダーのひとりに興味深く描いた『ケア・ハーディの小説風伝記』（J. コックバーン著、永田・宇佐見訳、中央公論社）が昨年出ているし、また最近ではペリングの『イギリス労働党の歴史』（小川喜一訳、日本評論新社）も刊行されたことを、附記しておきたい。（今井 宏）